

中部電力鉄塔建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

駒ヶ原東・中越遺跡

1991

宮田村遺跡調査会

序

近年、発掘調査によって検出される遺構が、家の跡や墓といった個別的なものでなく、ムラそのものとか、田や畑を含めた規模にまで拡大してきているように、考古学の対象が、我々の祖先の居住空間の中だけでなく生活空間のすべてにまで広がりがつあるとともに、保存状態の良い遺跡が次第に開発されるにつれ、保存状態の良い遺跡、つまり以前にその一部を破壊し、我々の居住空間へ取り込んだ遺跡も、再開発に際して何らかの保存措置を講ずるようになってきました。それらの結果、開発行為に伴う発掘調査の量は増大する一方であり、開発計画との兼ね合いの中で、十分な調査期間が確保できないということが、文化財保護にあたる立場にある我々の切実な悩みとなりつつあるのが現状です。

今回の電力鉄塔工事に伴う発掘調査地点は、耕地整理後の水田と住宅地の中であり、その点ではきわめて今日的な調査であったわけですが、工事に先立ち中部電力株式会社飯田支社からは、工事開始のほぼ一年前に連絡をいただき、結果として十分な準備と余裕をもった調査を実施することができたのであります。幸いにして工事範囲にはみるべき遺構がなく、ごく短期間の調査で終了したとはいえ、他地点での調査の合間をぬって発掘せざるをえなかつただけに、この時間的余裕は、何よりも有難いものでした。また、発掘調査にかかわる経費の負担についても、当初から誠意をもって応えていただきました。

遺跡保存に対する、中部電力株式会社飯田支社の誠意ある態度に敬意を表するとともに、一連の調査に際しての、土地所有者の皆さん、関係者の方々、さらには調査地点付近の多くの皆さんのご好意、ご協力と、現場の発掘にあたられた宮田村遺跡調査会会長 友野良一先生をはじめ作業員の皆さんの御苦労に感謝申し上げます、序といたします。

平成3年10月20日

宮田村教育委員会

教育長 林 金茂

例 言

1. 本書は、平成3年度に実施した中部電力鉄塔建設工事に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査は、中部電力株式会社の委託をうけた宮田村遺跡調査会が、平成3年4月2～6日と5月31日、6月1日に実施した。
3. 記録図面、写真、出土遺物等の資料は宮田村教育委員会が保管している。

目 次

序

例 言

I 調査の経過	2
1 調査にいたるまで	2
2 調査組織	2
II 駒ヶ原東遺跡	3
1 遺跡の概要	3
1) 位置、地形、地質	2) 周辺の遺跡
2 調査結果	5
1) 調査の範囲と方法	2) 遺構と遺物
3 まとめ	6
III 中越遺跡	6
1 遺跡の概要	6
1) 位置、地形、地質	2) 周辺の遺跡
2 調査結果	7
1) 調査の範囲と方法	2) 遺構と遺物
3 まとめ	9

図 目 次

図1 調査地点図	3
図2 駒ヶ原東遺跡調査範囲図	4
図3 駒ヶ原東遺跡平面図	5
図4 駒ヶ原東遺跡出土遺物実測図	6
図5 中越遺跡調査範囲図	8
図6 中越遺跡平面図	9
図7 中越遺跡出土遺物拓影	9

図版目次

図版1 駒ヶ原東遺跡 遠景	2号トレンチ
図版2 駒ヶ原東遺跡	5号トレンチ
	ピット出土遺物
図版3 中越遺跡	発掘状況
	ピット出土遺物

I 調査の経過

1 調査にいたるまで

平成2年12月、中部電力株式会社飯田支社より、平成3年秋以降に、宮田村へ駒ヶ根方面から電力を供給している春近赤穂34号線の付け替え工事に伴い、鉄塔基礎部分の拡張工事が予定されているところから、その用地内での遺跡の有無について、問い合わせがあった。

協議の結果、中越遺跡と駒ヶ原東遺跡⁽¹⁾にある各1基の拡張部分を発掘調査すること、厳冬期をさげ、平成3年春の水田耕作前に調査を実施すること、費用については原因者負担とし、当初限度額をさだめ、調査終了後に清算払いすることで合意した。以後数回の協議をへて、平成3年3月、委託者 中部電力株式会社飯田支社長下川利郎と、受託者 宮田村遺跡調査会会長友野良一とのあいだで契約書を取りかわし、調査にはいった。

計画では、4月1日から4月20日の間に現場での作業を完了する予定であったが、途中、他地区での調査が緊急に必要なため、両者の合意のもとに、水田となっている駒ヶ原東遺跡を4月2～6日、畑地と宅地の一部になっていた中越遺跡を5月31日と6月1日に調査した。調査期間でわかるように、両遺跡ともに見るべき遺構や遺物は検出されず、調査費用も当初予定した額を大きく下回り総額で44万8千円にとどまった。

2 調査組織

今回の遺跡の調査にかかわる組織と、現場の発掘調査に参加され、実際の作業をしていただいた皆さんは次のとおりである。

◇宮田村遺跡調査会

会 長 友野 良一
委 員 宮木 芳弥
" 片制 貞治
" 平沢 和雄
" 青木 三男
" 伊東 啓一
" 唐木 哲郎
教育長 林 金茂

◇宮田村教育委員会

教育次長 小林 守
係 長 古河原正治
係 小池 孝

◇調査参加者

酒井鮎子 平沢きくみ 木下道子 原 毅 小田切守正 伊藤茂子 浦野由子

II 駒ヶ原東遺跡

調査地点：宮田村6,368-1

土地所有者：太田耕一

1 遺跡の概要

1) 位置、地形、地質

太田切扇状地を開折して天竜川にそそぐ小田切川の、下流域の右岸段丘上に位置し、標高640m、小田切川の河原との比高差10mを測る。段丘は、南を同じく天竜川へそそぐ太田切川によって切れ、規模が大きいながら長い尾根状の台地となっており（台地面は先端近くが大原、他の大部分が駒ヶ原の字名となっている）遺跡の位置はその台地北縁ということになる（図1）。

調査地点付近は、大正2年から昭和15年までを費やした2次にわたる耕地整理によって水田化され、整然とつづく階段状に整地されており、原地形を想定するのは困難だが、台地先端には、

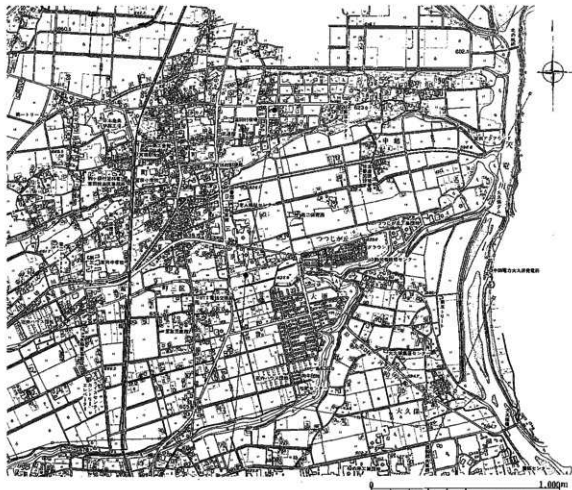


図1 調査地点図（1. 駒ヶ原東遺跡、2. 中越遺跡）

大久保の掘割りの南に大きな洞、その南にやや小さな洞があり、現在観察することができる水田面の比高差からも、台地上には特にその先端に、東西に走る流れあるいは溝が何本かあったことが考えられる。小田切川下流域の台地北縁は、全体の傾斜に従って東へ傾くと共に、洞に注ぐ溝に向かって、台地中央方向である南へもゆるく傾斜していたものであろう。

調査対象である鉄塔建設用地は、台地北縁の水田面の北東隅にあたり、やはり耕地整理されているが、付近には、耕地整理をまぬがれた地点が2箇所ほどある。それらの地点はいずれも台地北縁にあり、水田面よりやや高く、台地北縁には、大きめの土手がある。

東へ傾斜する台地上の水田の東隅ということで遺物包含層や遺構が残っていることを期待したのだが、用地内のトレンチ調査の結果、耕作土の下は全面がやや赤みを帯びた黄色土であり、漸移層もなく、開田の際に、包含層があったかもしれない土壌部分は削り取られていることがわかった。北縁にある高い土手は、開田の際の削り残しだったのである。

なお、駒ヶ原台地の水田は、昭和46年から56年にかけて全村的に実施された県営農場整備事業の中で再整理されているが、調査地点付近は、その対象からは除外されている。

2) 周辺の遺跡

駒ヶ原台地縁辺には、縄文中期や平安時代末期の集落址が連なり、古墳群も点在しているのだ

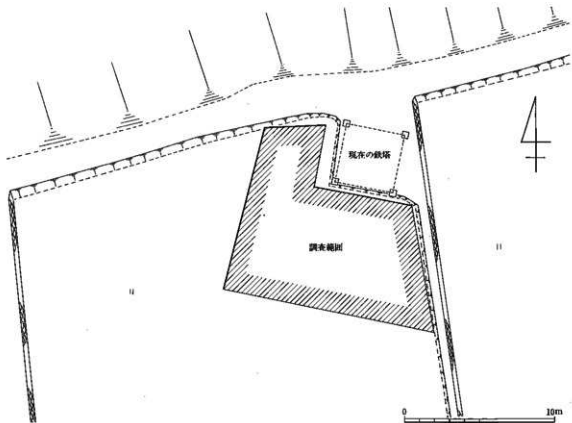


図2 駒ヶ原東遺跡調査範囲図

が、調査地点は、台地先端の滝ヶ原遺跡の集落址（縄文中期）と、北縁の中流から上流域にかけての三つ塚遺跡から三つ塚上遺跡に連なる大集落址（縄文中期）と烏林・三つ塚両古墳群（6世紀）の間の、遺跡の分布としては希薄な一帯であり、いままでに、遺構や、遺物が多く採集される地点が確認されたことはない。昭和27年、宮田村埋蔵文化財委員による分布調査の際、縄文中期の遺物が採集され、遺跡とされてきた。

2 調査結果

1) 調査の範囲と方法

中部電力から示された計画によれば、現在4×4mの規模である鉄塔敷地を、主として南と西へ拡張して11×11mの規模にし、4本の脚以外の部分についても表土を取りのぞいて砂利を入れるということであったので、予定されている鉄塔敷地の全面を調査の対象とし、手順としては、

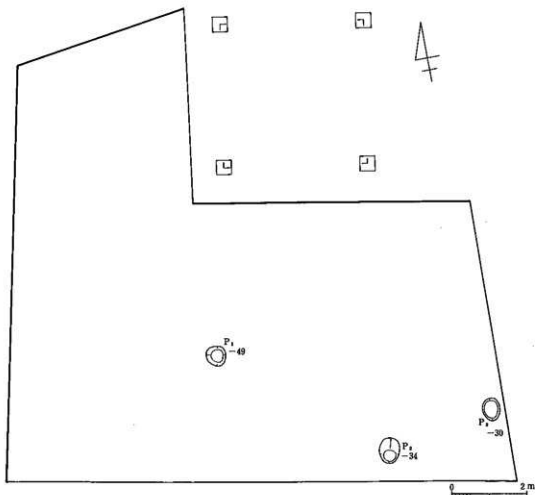


図3 胸ヶ原東遺跡平面図

とりえず拡張部分を調査し、その結果必要があれば現在の鉄塔の下の部分も調査することとした。拡張部分は、まず全体を幅2mの南北に長い短冊型に分割して一つおきに発掘し、埋め戻した後その間を発掘する方法をとった。結果として、鉄塔の下は調査する必要はないと判断し、発掘していない。調査面積は114㎡である(図2)。

2) 遺構と遺物

水田の耕作土とその下のわずかな鉄分の沈殿層を除去すると、やや赤みを帯びた黄色土が全面にわたってみられ、土壌化した部分はまったく見出すことができなかった。すなわち、昭和初期の耕地整理の際、遺跡があったとすれば存在していた包含層がきれいに削り取られているわけで、調査範囲に検出された3基のピット(図3)も人為的なものとはいい難く、今回の調査では、遺構の有無については不明とせざるをえない。

遺物は、耕作土直下の水田の下の地場として踏み固められた土の中から、近世の陶器片が2点出土したにすぎない(図4)。1は、内外に鉄胎のかかった薄手の壺か甕、2は外側に厚く鉄胎のかかった蓋の一部で、いずれも摩滅が著しいことから、原位置からかなり移動していることはいえる。

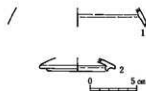


図4 駒ヶ原東遺跡遺物実測図

3 まとめ

今回の調査では見るべき遺構や遺物は検出されなかったが、その中でも一定の成果はあげられたと考えられるので、以下にそれを列記し、今後の埋蔵文化財保護の一助としたい。

- ①駒ヶ原台北縁の今回の調査地点付近では、昭和初期の耕地整理の際、かなり削平されているので、水田となっている部分には、遺構等が残っていない可能性が高い。今後は、耕地整理されなかった畑地の部分を注意してみる必要がある。
- ②調査地点付近は、小田切川の侵食面を見下ろし、北側に開けていると見がちだが、むしろ南向きの、水田面の比高差と地形から想定される、大久保の掘割りの洞へと続く低地に面した地帯である。
- ③付近での表面採集の結果では、遺物の分布は希薄である。

III 中越遺跡

調査地点：宮田村7,513-3地

土地所有者：宮田村

1 遺跡の概要

1) 位置、地形、地質

中越遺跡は大沢川と小田切川の間に形成された細長い尾根状の台地の上に位置している。遺跡としてとらえられている範囲は広大で、南北が台地の幅いっぱい、東西700m、面積約24haとされ

ている。遺跡の中心部で、天竜川の河床からの距離1kmである(図1)。

この広大な遺跡の中で、昭和31年から57年までの14次にのぼる各種の調査につき、西原土地区画整理事業に伴う10次におたる調査、数多くの個人住宅建設に伴う調査が実施されてきた。

その結果、現在は平坦に見える台地上面も、かつてはかなり起伏が激しかったことがわかってきた。土壌部分が表土の下数十cmの厚さに地積して包含層をなしている所、表土下がすぐに礫まじりの黄色土で明らかに微高地が削られているとわかる所など変化があり、溝であったと考えられるものもいく筋がある。それらの微高地や溝は、台地の向きと同じ東西方向にはしているらしい。そのうちのひとつに中央グランド付近から東流して台地南縁へぬけるかなり深い溝があるのだが、それを界として台地は、北側の高くて高燥な面と南側のやや低位な面に分かれる。

今回の調査地点はBJ30グリッド_(a)に位置し、遺跡全体の中ではほぼ中央の、北側の高燥面の南縁にあたり、すぐ南が一段低くなっている。

遺跡のある台地面の形成時期は新しく、およそ2万年前とされており_(a)、腐植土の下は太田切屑状地を形成している砂礫の多く混じる黄色土で、所によっては砂礫層といった観も呈している。

2) 周辺の遺跡

広大な中越遺跡は、大観すれば、台地北側の、中央グランド北を中心に国道から東へ300mの範囲に立地する縄文前期の集落、台地南側の、国道よりやや東から諏訪神社付近までの600mの範囲に展開する縄文中期の集落、台地南にある低位面に存在する縄文後期の墓域からなりたっており、調査地点は、縄文前期の集落の東端に近い、縄文中期の集落との中間である。

中越遺跡が位置する台地上には、縄文草創期から早期の向山遺跡からはじまって弥生時代後期の姫宮遺跡、奈良・平安時代の大集落が予想されている田中下遺跡(『延喜式』の宮田の駅をこの地に想定する説も多い)、さらには近世伊那街道の宮田宿と、各期の中核となる集落が連続として存在している。集落立地として、地形的に如何にすぐれていたかを示していよう。

2 調査結果

1) 調査の範囲と方法

現在、立て替えを計画している鉄塔の基礎部分には、一辺6.4mの正方形にコンクリートが貼られている。中部電力から示された計画によれば、南東隅を基点として北側と西側をそれぞれ1.6m拡張して一辺8mとし、現状と同様、コンクリートを貼るということであったので拡張部分を全面調査することとした。西側は用地外に土置場を確保できたが、北側はそれができなかったため、用地内で土を反転させる方法をとった(図5)。調査面積は24.6㎡である。

なお、現在の鉄塔の基礎部分は建設時に発掘調査しており、みるべき遺構や遺物はなかったとされている。

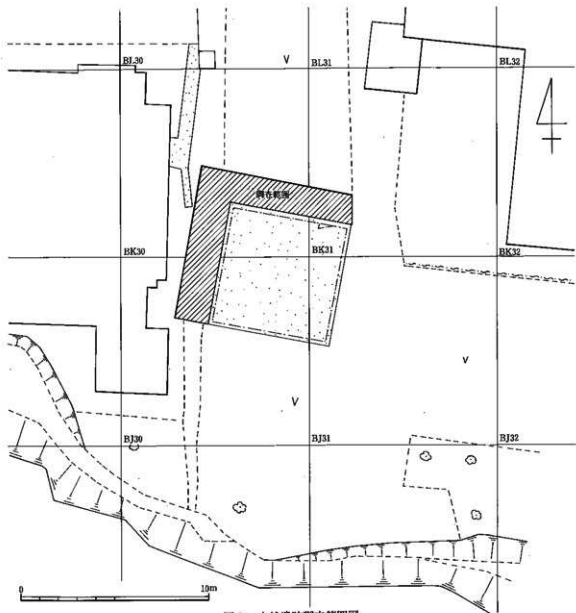


図5 中越遺跡調査範囲図

2) 遺構と遺物

表土を取り除いたところ礫まじりの黄色土があらわれただけで、遺物包含層はない。黄色土上面でピット1基のみが検出されたが(図6)、その性格は不明である。関連する遺物もみつからない。

遺物は、縄文前期中越式の無文胴部片一点が出土したのみである(図7)。

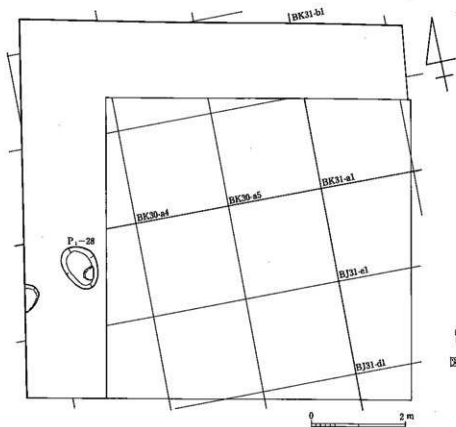


図6 中越遺跡平面図

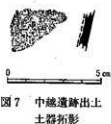


図7 中越遺跡出土土器拓影

3 まとめ

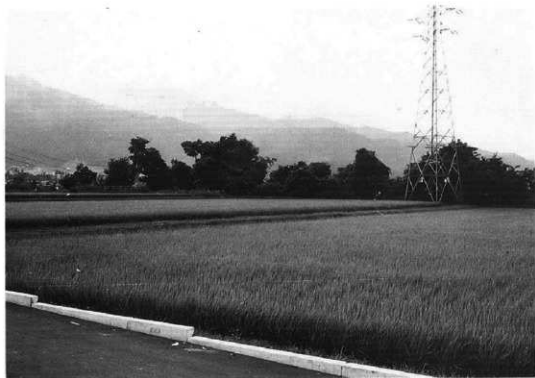
今回の調査では見るべき遺構や遺物は出土しなかった。表土はごく浅く、現在周囲よりやや高くなっている調査地点は、本来もっと高く、ある程度削平されてきたものと考えられる。

位置的には台地北側の高燥面の南縁、縄文前期の集落の南東側であり、高燥面の南縁までは集落が広がらないことが確認されたことで、一定の成果をあげたということができよう。

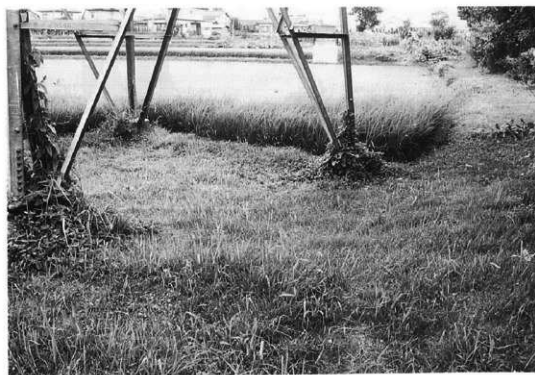
註1 当初、昭和51年に作成された「宮田村遺跡分布図」にしたがって駒ヶ原下遺跡とし、中部電力ともその遺跡名で契約書等を取りかわっていたのだが、「長野県史 考古資料編」の遺跡地名表や、「宮田村誌」では駒ヶ原下遺跡を三つに分け、駒ヶ原下・駒ヶ原中・駒ヶ原東としてありそれによると今回調査した地点は、駒ヶ原東遺跡にはいる。網分されたあとの駒ヶ原下遺跡とさざらわしいので、このようによぶこととした。

註2 昭和53年に実施した範囲確認調査の暴散定されていた遺跡の大部分への10mメッシュの区画をもとにした地区設定。宮田村教育委員会『中越遺跡』1990に詳しい。

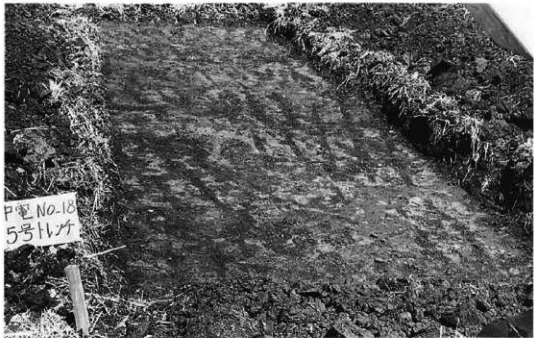
註3 寺平 宏他「長野県上伊那郡宮田村地域の第四系」『上伊那教育会研究紀要第10集』1989



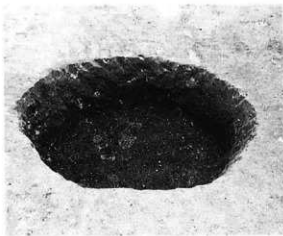
遠景（南より）



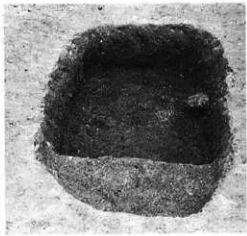
近景（東より）



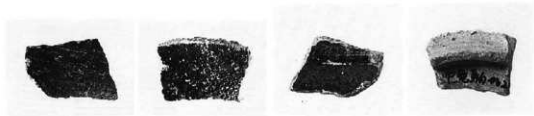
5号トレンチ



ピット1



ピット2



出土遺物

図版三
中越遺跡



西側



北側



ピット

中部電力铁塔建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

駒ヶ原東・中越遺跡

平成3年10月20日 発行

発行 宮田村遺跡調査会

印刷 ほおずき書館(株)

長野市中越293
